

313 腹腔内癒着組織および腹水細胞を用いた nested PCR法による Chlamydia trachomatis の検出成績とその意義

順天堂大学医学部産婦人科学教室

斉藤十一, 斉藤英樹, 宇津野栄, 宮崎亮一郎, 鈴木正明, 高田道夫

〔目的〕子宮頸管の *C. trachomatis* (CT) が陽性で明らかに PID 症状を示した場合でも, 現在使用されている検査法では腹腔内癒着組織および腹水細胞から CT が検出されとは限らない。そこで今回, 2 重に Polymerase Chain Reaction (PCR) を施行する nested PCR により直接 CT の DNA を検出し, PID の実態をより明かにすることを試みた。

〔方法〕CT の菌体外膜蛋白コード遺伝子領域内の 1050 bp を 1st. PCR の標的 DNA として 30 cycle 施行後, その内側に位置する 1008 bp を 2nd. PCR の標的 DNA として 30 cycle 反応させた。PCR のサーモサイクルとしては, ともに 1 サイクルを melting step: 92°C 1 分, annealing step: 50°C 1 分, extension step: 72°C 1 分とした。検出方法は, エチジウムブロマイドを用いたゲル電気泳動法を施行後, 紫外線照射による発色反応法により行った。対象は, 下腹痛を主訴とし腹腔鏡下に膜状癒着または腹水を認めた 10 例 (A 群) および不妊を主訴とした 10 例 (B 群) である。なお, A 群 B 群ともに従来法では CT は検出されていない。

〔成績〕A 群 10 症例においては, 腹腔内癒着組織から 4 例, 腹水細胞から 2 例に DNA が検出された。B 群 10 症例においては, 腹水細胞から 2 例, 腹腔癒着組織から 2 例に DNA が検出された。なお, nested PCR 法で陽性を示した症例での血清抗体価 (イパザイム) は全て IgG: $\times 128$, IgA: $\times 16$ 陽性であった。

〔結論〕nested PCR 法を用いて腹腔内癒着組織, 腹水細胞から直接 CT-DNA を検出することにより, 現状よりさらに一歩踏み込んだ PID の原因究明が可能となり, 婦人における CT 感染のよりの確な治療が行えるようになった意義は大きい。

314 子宮頸管炎患者における子宮頸部及び内膜からの分離培養法による Chlamydia trachomatis の検出

長野赤十字病院

本藤 徹、菅生元康、矢嶋 元、中川俊介、成 鑑非

〔目的〕女性性器クラミジア (*C. trachomatis*) 感染症ではその子宮内膜感染の実態が必ずしも明らかではない。今回我々は子宮頸管炎患者のなかで酵素抗体 (EIA) 法により *C. trachomatis* 頸管炎と診断された症例において頸管、内膜両者から、EIA 法より特異性が高いと考えられる分離培養法を用いて *C. trachomatis* の検出を試みた。

〔方法〕非妊婦の子宮頸管炎例のうちで EIA 法 (IDEIA) 陽性と診断された 60 例を検索対象症例とした。培養検体は EIA 法による検査後 7 日以内に頸部からは綿棒で、内膜からはエンドサイトで採取し、直ちに SPG 培地に入れ培養まで -80°C 以下に保存した。培養法はあらかじめ径 15 mm のカバーガラス上に培養した HeLa 229 細胞を用い、遠心吸着法により行なった。細胞質内封入体の確認はマイクロトラック法で行ない、明らかな封入体が 1 個以上認められた検体を陽性とした。なおそれぞれの検体についてカバーガラス上の封入体数を算定した。

〔成績〕60 例中 54 例 (90%) が培養法陽性であった。そのうち頸管、内膜両者が陽性であった症例は 30 例、頸管のみ陽性の症例は 17 例、内膜のみ陽性であった症例は 7 例であった。頸管、内膜両者陽性 30 例のうち内膜検体の封入体数が頸管と同数以上あったものは 16 例であった。

〔結論〕子宮内膜から *C. trachomatis* を上行性に検出する場合、頸管からのコンタミネーションが問題となる。しかし本研究で少なくとも 40% (54 例中 23 例) 以上の *C. trachomatis* 頸管炎症例では内膜にも同病原体が感染していることを培養法によって明らかにした。